二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 大熊狸喜
挿絵 和馬村政

プロローグ　不動家の退魔三姉妹　006
第一章　姉妹退魔巫女　拘束　017
第二章　長女静音　処女巫女搾乳強姦　030
第三章　次女凛　処女退魔師肛虐淫姦　081
第四章　三女七重　剣戟妹処女姦奪　135
第五章　不動三姉妹　敗北の巫女たち、絶対妊娠への完全姦堕　188
エピローグ　姦落の先で　246

登場人物紹介

Characters

不動 静音（ふどう しずね）

最強の退魔師一族「不動家三姉妹」の長女。対淫魔戦闘の場でもリーダーを務める。

不動 凛（ふどう りん）

三姉妹の次女。やや粗雑な性格であり、ルックスも中性的な少女。

不動 七重（ふどう ななえ）

三姉妹の三女。使命感が強く、真面目な性格。実は母親に一番近い能力の持ち主。

不動 沙羅（ふどう さら）

三姉妹の母。全国退魔師同盟の代表。

雷惨（らいざん）

醜き男淫魔。かつて沙羅によって討ち祓われた強力淫魔の一体。

『第二章　長女静音　処女巫女搾乳強姦』より

（か、身体に…巻き付かれて……っ!?）

更に伸びた柔熱い帯触手は先端部で三本の長い触手に枝分かれをすると、少女の巨乳は三本指のようになった触手によって背後からムプリ…と掴まれ持ち上げられた。

「何……をっ…！」

左右それぞれの乳房が細い蛇のような指触手に巻き付かれると、まるで処女巨乳の柔らかさを味わわれるようにムニプニと指を食い込まされて、巻き布に護られた胸を変形させられる。既にたっぷりと淫魔の淫液を含まされた布が触手指から染み出す催淫体液を更に吸わされ、揉まれる度に淫液がヂュウゥ…と絞られ、こぼれた。

（くっ……胸を、弄ばれて……！）

サラシといっても布である。淫指の圧力を防ぐ堅さなどなく、指触手の力に合わせて下乳が、外乳が、上乳が、押されこねられ乳房全体を揉まれる。粘性も滑りも高い催淫淫液に布生地と肌の間にヌトリと入り込まれて、サラサラの布と敏感にされた乳肌とを媚弱に擦り合わせられた。

ヌチャすりり、タプしゅリ、すりヌルしゅリり。

「はっっ……ぅぅっっ！」

触手や淫液だけでなく布の感触を感じさせられる事で、乳肌全体の神経が執拗に擽（くすぐ）られて刺激を受ける。サラシに隠された胸はジンジンと熱を溜められて、桃色をした先端媚突

はキュウ…と過敏な硬直を見せ始める。柔らかく形を変えられる布地は雷惨や淫魔兵だけでなく、捕らえられた妹たちや静音本人の目にさえも、誘うような淫らな姿に見えた。
その間にも少女退魔師の腿やお尻は袴の上から淫液垂れる触手でネトプチュとさすり上げられ、柔らかい上腕や脇の下はヌルつく無数の舌触手たちに舐め吸われ続けている。
（い、いけない……身体が…）
素肌と布越しという別々の触手刺激を受けた少女の身体は、逃れようと身をくねらせて本能的な抵抗を続ける。しかし複雑な感触を与えられている肉体から甘媚電を送られ続けている処女の聖胎は、ジットリとして焦れったいような媚熱にクツクツと休む事なく炙られて、退魔少女の肉体からは僅かずつだが確実に抵抗の力が抜かれ始めていたのだ。
退魔師として鍛えた肉体が、淫魔の歪んだ性快楽に蝕まれ始めている。
（しかし、まだ……）
せめて直接触れられれば、体内の退魔力を直接打ち込む事もできるのだ。しかし触手に捕らえられている今の状態では淫魔との距離が開きすぎていて、触れる事は適わない。反撃の隙ができるまで、今はまだ触手の淫辱汚愛撫に耐えるしかないのだ。
「そろそろお前の巨乳を見てみるとするか」
「なにを、あなたなどに――あっ!?」
静音は自身の胸に視線を下ろし、息を呑んだ。激しい動きにも緩む事のない程しっかり

と巻かれたサラシが、胸を揉まれて変形させられながら少しずつ緩まされてゆく。綺麗に水平だった細い布は既に上下に乱れ、所々の隙間からは白い肌が覗けている。

触手指を振り払おうと上体を揺するが、柔乳に食い込まれた淫指には、離れる事なく我が物顔での揉み陵辱を繰り返されて、巻き布が解かれ隙間が広げられてゆく。

（……私の胸が…晒されてしまう……っ！）

母の、仲間の仇である淫魔によって、恥心の源泉である九十七センチの巨乳が剥き出しにされて淫視線に晒されてしまう。冷静に努める静音の眉間に小さな焦りジワが刻まれて、胸肌を裸に剥かれるという羞恥に頬が上気し、急くように息も激しくなる。

「こ、こんな……くっ！」

ハラリ、ぱら…と次々に巻き布が解かれてゆく。右の上乳肌が露わにされて、左の横乳肌が外気に晒され、左右の下乳が支えを失う。

はだけられた巫女服内のお腹廻りで緩められた布が緩やかに解かれ、護るべき少女の乳肌から剥がれ落とされる。淫液に濡れた僅か数本の白布に辛うじて乳首を隠されて、静音の白肌巨乳は淫魔たちの淫視姦に晒されてしまった。

桃色媚突を護る純白の布も淫魔の淫液をたっぷりと含まされて、処女乳首の桃色をうっすらと透けさせている。巨大な乳肌の殆どを剥き出された自身の恥ずかしい姿に、頬を朱く染める少女退魔師。羞恥する静音に向かって、更に男淫魔は淫らな観察を口にした。

「ホホォ…解いた布が乳首を隠しているのは、興奮した乳首に布が引っかかっているからだな……？　不動家の娘ともあろう女が、恥ずかしい身体だな」
「ざ、戯れ言――ひぅっ……は、ふううぅっっ！」
左右乳首を隠す布の端がそれぞれ一本ずつの指触手に掴まれて、チュリシュリと左右に揺すられ始める。まるで少女のコンプレックスである巨乳の中心、桃色乳首を更に目立たせるほど恥ずかしく綺麗に磨き上げるかのように、濡れたサラシでじっくりと丁寧に。
シュクチュク、すりゅしゅちュスリすりリ。
「ぁく――か……ふふぅ……！」
（や、やめ――胸……先端が――ぁ……っ！）
淫液を含まされてヌルつくサラサラした布で、両胸先端の硬化した媚突を別々のタイミングで擦られる。左右の小さな一点を同時にさすられ、先端からの鋭い媚電の針にズチズチと心臓を射抜かれる。鼓動が高まり身体は汗を吹き、絶え間ない甘電に脚の指までが閉じたり開いたりを繰り返してしまう。妹たちの目の前で淫らな敵である淫魔に恥心の源泉を弄ばれて、更に敏感に性神経を目覚めさせられてゆく恥辱。
敵を睨み付ける少女の視線からは刺すような鋭さが削られて、冷静を装う必死の色が浮かび始める。更に胸淫辱で静音を追い込もうと、残った一本の指が乳肌に襲い掛かった。指全体が薄く広がり微細な柔毛のような極細触手を生やす。

短毛な柔ブラシ状に変化した細帯触手は巨乳肌全体を下から持ち上げると、濡れた触手で広い乳房をワチャプムュと媚擦り始めた。

「はぅ――っっ！　ぅ……ぐうぅぅ…っっ！」

淫液に濡れたサラサラ布で好き勝手に媚突を擦られて、更に敏感にされた乳肌を微細な柔ブラシ触手で揉み上げられながら擦られる。淫液を塗り広げられて浸透させられて、胸の神経感覚がピリピリと痺れる性神経へと開発されてゆく。

（むね…胸が……熱いぃっ！）

まるで巨大な原生生物に胸全体を下からタププムニと揉まれて、肌を舐られるような不快感。更に自身の胸を護る筈の布が濡らされて奪われ、媚突を細かく擦られている。乳房全体の性神経が熱せられて内側から巨乳が暖められて、先端で味わわされ続けている鋭い媚甘電に胸から心臓、更に聖宮までを何度も何度も突き抜けられる。

体内を通り抜けた甘電の針には、つま先や足の裏で増幅されて反響されて、そのまま体内最奥の処女子宮が上下から性感電に突き回されてトクトクと炙られた。

「ふくっ……これ、しき――あむ、んん……っ！」

淫液の染み込まされた袴の上からお尻や内腿を触手に撫でられて淫痴漢されているのに、足首をガッチリと掴まれていて閉じる事もできない。肉体に与えられる刺激から少しでも逃れようと無意識に身体が捩れ、汗浮く背筋がキリリと反らされる。絞られるような感覚

で自分の媚突が硬化している事が解り、敏感にされた乳輪がぷつぷつと粟立つと、敏感すぎる乳首の刺激に瞼がシットリと落ちてきた。
「いい顔だな、三姉妹の長女、不動静音よ」
「お、お黙りなさい……雷惨！」
追い詰められてゆく退魔少女の姿を楽しむ淫魔は、尚も気丈に振る舞う静音を更に辱めようとイヤらしい目を光らせる。
「いい返事だ。お前の胸、更に淫らに開発してやろう」
巻き布を下に引かれると乳首上肌が擦られ、朱く充血した乳輪が弾かれるように露わにされる。更に布が下げられると、硬化した桃色乳首が弱々しく布を引っかけて乳首を隠す最後の抵抗をした。
（サ、サラシが…奪われる……胸が、見られる…っ！）
少女退魔師の心が強い羞恥に駆られ、一瞬眉根が弱々しく下げられる。
すりり、ぷるん……っ。
「……うぅっ！」
純白の胸布はハラリと剥がされ、桃色の先端処女媚突が晒された。ツンと上を向いて硬化した静音の乳首に、男淫魔の視線が、下級淫魔兵たちの淫視が、ヅキヅキと遠慮なく突き刺さってくる。そして、姉の身を案じる妹たちの視線も――。

「し、静音姉さん……っ！」

目の前で裸に剥かれてゆく姉の姿に、妹退魔師たちの心も焦燥させられてゆく。

黒髪長女の乳首は淫魔の淫液にまみれて艶を浮かせ、刺激を受け続けた影響でやや濃い桃色に充血していた。左右共に形も大きさも揃い、白くて丸い巨乳の中心でポツリと小さく自己主張をしていて、はだけられた清楚な巫女衣装というアンバランスさも手伝って禁断の淫靡さを存分に放っていた。

「処女らしい、よい色艶だ。俺様が犯すのに相応（ふさわ）しい乳だな…フフン」

ニヤつきながら勝手な淫感想を述べる男淫魔。触手先端が分かれた三本指のうち二本の指で柔乳房を揉まれながら、一本の指で硬化した媚突をクニクニと優しく弄ばれて、ほんの少しだけ強い力でピッ、ピッ、と弾かれる。

「いぅっ……おのれ、不埒（ふらち）な――んん…っ！」

敏感にされた乳首を触手指にピチピチと弾かれると、強い甘電に胸部全体が鋭く貫かれて背中が跳ねさせられてしまう。そんな、女としての性反応をいちいち淫魔に確かめられてしまうのが、長女である静音にはこの上ない屈辱である。

媚突を揉み弾き弄んでいた左右の淫指が透けた薄朱色に変色をすると、小さいラッパのような吸盤型に変形をする。透明触手は開かれた口からトロタラと淫液をこぼすと、黒髪退魔少女の剥き出し両乳首にプチョッと吸い付いてきた。

「ひゃぅ――ぅっっ！」
熱を帯びてヌル濡れた触手の吸口は乳輪全体までも包み込むと、決して離すまいとでもいうような意気込みで吸引を開始する。吸引力を持ちながらも柔らかいままの吸盤内壁に、乳首先端中央の窪みや乳輪に浮く微細な粒突にまで隙間なく吸い付かれ、更に針先端程の小さな毛細触手にシュリチュルと乳首媚肌を撫でさすられた。硬化した乳首や粒突だけでなく予想外に敏感なその根本までもが、触手愛撫に晒される。
チゅうシュルる、プチュム、くちゅシュプちゅうぅ。
「ぁく……ぐくく、うぅ――っ！」
（ち、乳首から離れ――あひゃうぅっ！）
左右の乳首を吸う吸盤の中に綿棒ほどの触手が三本ずつ現れて、処女退魔師の硬化した媚突が摘(つま)み上げられた。堅くて細かいスポンジのような表面を持った綿棒触手で、先端媚突が優しくプニムキュと摘まれ撫でられる。吸盤内部には更にマッチ棒ほどの触手が形成されると、乳首先端に充てられて過敏な窪みがクニプニと押された。
「くぅ――ぁうう……はぁ、はぁぁ――っ！」
濡れ熱い毛細触手で満遍なく吸い撫でられる桃色乳輪と、周囲三点先端一点の合計四点での愛撫を受けさせられる硬化乳首。乳頭部に与えられる多彩な淫愛撫で、胸の先端から背中、お腹の筋肉までが細かく震えて反応させられる。乳首と子宮が熱を上げさせられて、

全身が霧吹きで吹かれたような汗を浮かせる。
（胸……私の、むねが……っ！）
先端で朱く硬化した乳首を吸い包まれながら、白くて豊かな乳房が二本の細長い指触手に巻き上げられ揉まれ、淫液を纏わされてイヤらしく艶めき柔変形をさせられる。淫らで嫌悪すべき牡の性暴力に晒されている自分の乳房なのに、揉まれる乳房の淫靡な光景に視線を奪われ、思わず心臓がドキンっと跳ねる。
敵を厳しく睨み付けていた視線から強い意志の光が僅かにユラリと揺れて、少女の動揺が隠しきれない程に追い詰められてくる。そしてそんな変化を、女を責め堕とす男淫魔は察知する。
「揉まれる自分の乳房に興奮したか……最強の退魔師などと粋がっていても、所詮女は女、女体の持つ淫らさには抗えんなぁ」
「い、淫魔が――はっ…何を、言うのか――っ！」
（むね……もぅ、いやぁ…っ！）
内心を淫魔に見抜かれながらも、動揺を表に出さず尚も凛々しく抵抗する静音。しかし額に流れる一筋の汗は、本人の意志を無視し始めた肉体の変化を如実に見せていた。
退魔少女の乳首を撫で責めていた綿棒触手の表面に毛先よりも更に微細で鋭い、細針触手が生えてくる。媚突先端をツンツンと突かれると、針触手がこれから何をしようとして

いるのか想像させられた。
（！　ま、まさか……っ⁉）
息を呑む少女は別の触手に頭を取られて自身の乳首から目を逸らせなくされる。左右それぞれの敏感媚乳頭に数本の針が充てられると、乳房に向かって綿棒触手が押し付けられ始めた。微細な針を突き立てられるという未知の感触に襲われる、少女退魔師の処女乳首。
にゅチュプぷ…つぷぷ。
「――っはあぁ……っっ、ひぅっくふふっ――胸にいぃっっ‼」
何の痛みも感じずに、微淫針に侵入される退魔少女の桃色濡れ乳首。淫液と淫触手によって揉み撫でられた異性を知らない処女の乳首は、僅かな母乳孔を開口させられる程に開発されていたのだ。極細い針状触手に犯される媚突が、内部から熱灼にされてしまう。
敏感に開発された静音の乳首は細指触手に摘まれた。何にも触れられた事のない母乳孔は綿棒触手から生えた細針触手によって犯されて、更に乳房内部へと侵入されてゆく。
ツプぷ……ちゅクく……。
（やめ、やめてぇ……胸が…犯されて……っ⁉）
淫針の侵入が停止すると、先端から乳首本体内部が、乳房内部の乳腺が、更にもっと奥深くの乳房全体の根本までが、淫魔の細針触手によって強姦されてしまった。
乳首内部が、乳腺が、乳房の脂肪細胞の全てが、淫魔の針触手によって内側から催淫体

液を塗り込められる。催淫液を塗られた乳房の媚細胞は瞬く間に熱せられて、乳房全体の神経が敏感な性神経へと染められてゆく。

「はひゃうぅっ…はひっくひっ、胸が――っ熱ぃぃ……っ！」

揉まれる事で外側から刺激されて、内部は直接淫液漬けにされて、乳首から乳房全体が内側から燃やされるように熱せられる。自分でも決して触れる事のできない女の源泉である乳房全体が、胸の奥深くが、男淫魔の触手によって好き勝手に弄ばれて、確実に占領されてゆく。理性は汚辱感しか感じないのに、胸と身体は飢餓感に蝕まれ悶えさせられる。

「もっとだ、もっとお前の巨乳を俺様好みに変えてやるぞ」

巨乳責めを楽しむ雷惨は、処女退魔師の悩乱姿にニヤリと笑った――。

淫液に染められた乳房内部は、何処に触手がいるのか解るほど敏感にされてしまっていた。母乳孔から侵入した針触手は所々で枝分かれをし、先端部は乳房奥深くの数カ所で淫らな糸ミミズのように蠢いている。それぞれの先端がプクリと膨らみ、微細なペニス状に変形をすると、乳首と乳房内部全体でのペニス抽送が開始された。

ちゅニュりゅぷ、たぷり、むちゅツチゅヌプりリっぷにモミにゅルムっっ！

「くひゅうぅっ……む、胸ぇっ――ひゃっひゃめえぇぇっっ!!」

乳房全体を柔らかく揉み上げられながら、奥深くの神経までもが針状生殖器の陵辱を受

ける。男性器の形をしながら毛根ほどの大きさもない先端の膨らみで胸の性神経が摩擦をされると、巨乳で解らされる勃起男根の形が少女の脳裏にまで教えられてしまう。
ピュウピュプと吐き出される催淫淫液が胸脂肪内部にたっぷりと染み込まされて血管に到達し、早められた血流に乗って胸奥から上半身全体へと広げられてゆく。身体を抱きしめる触手に背中をヌチュリと撫でられると、背中からお腹の筋肉全体が強く鋭い甘痺れに突き抜けられて、蕩けるように脱力をさせられる。
どくんどくんどくんどくんどくんどくん。
淫液で熱せられた上半身の神経に、胸の淫らな変形で視界を犯される官能に、胸脂肪を犯される恐怖とそれ以上の淫性快感に、心臓は焦燥の早鐘を打つ。冷静な理性は肉体の熱に炙られ追われ、思考能力が確実に阻害されてゆく。
羞恥の源泉である巨乳を好き勝手に弄ばれて、敏感な肉玩具に染められる。追い詰められる理性は犯される双乳房を白い衣で隠そうと一人でに身体をくねらせて、退魔少女のGカップ巨乳をタプンプルムと淫らに揺らせ映えさせた。
（こ、このままでは……あぁっ！）
ビッ、ビリリィィッッ！
静音を捕らえる筋肉の枠から生えた屈強な腕に、純白の巫女衣装が引き裂かれる。僅かに残されたサラシと解かれた胸当て、衣の残骸が緋袴に残り、退魔少女の上半身は乳房や

背中、乳下や脇の下など、殆どの素肌を剥き出しにされる程の露出状態にさせられた。
「下は袴で上は裸の巫女姿か……巨乳のお前には相応しい、淫らな格好だな…ククク」
「お、お黙り――むくぅ、あきゅうぅぅ……っっ！」
胸内部を犯されるツプヌプとした感触に、突然根本から乳首に向かって通り抜けられた。母乳孔に通じる胸脂肪内部の媚管を犯し抽送していた細針ペニス触手が、敏感にされた乳神経を一際擦り立てながら抜き出され始めたのだ。
毛根よりも小さいとはいえ、肉傘の膨らんだ亀頭部に柔脂肪を引っかけられながら擦られると、胸そのものを奪われるような吸引感覚に襲われた。針触手が抜かれて巨乳が乳房陵辱から解放されて、思わず小さく安堵をする黒髪退魔少女に、雷惨はニヤリと笑う。
「お前の巨乳は俺様が造り替えてやったぞ……もう決して元には戻せぬ、イヤらしい女巨乳にな」
男淫魔の言葉を不審に思った直後、退魔姉妹の冷静な長女は唐突な焦燥に理性を揺すられた。針ペニスによる乳腺強姦から解放された双つの乳房が急激な熱を上げると共に、未知の強い放出欲を訴え始めたのだ。
「ぁあ、ぁあぁっ、こっ、こんなぁ……きり、ぁぐ、きぅぅあぁぁぁあっっ!!」
（胸が、乳房が熱ぃ……切ないぃぃっ!?）
視線を淫魔に向かされたまま必死に歯を食いしばる少女。たっぷりと実った柔巨乳がジ

クジクと強い熱に浮かされ、内部は火が点けられたようにカァッと燃えている。胸の奥から先端に向かって知らない何かが溜められてゆき、同時に強い性感が乳首から胸全体へ、更にお腹から子宮へと流れ込んでくる。

「はぅ…かはぅ――はぁ、はぁ、わたしの…むね、は……ぁっ！」

強すぎる未知の感覚に理性が追い立てられて背中が反らされ、羞恥の源である九十七センチの乳房が自然に突き出されてしまう。全身が一斉に汗を噴き、細い背中やツルツルの白肌を水滴となった汗が幾筋も流れる。

「お前の女乳はこうして俺様に使う為にあるのだ……教えてやろう」

汗と淫液に濡らされて、タプポユと揺れ弾みながら淫らに光を反射させる双柔巨乳の深い谷間に、熱太くて堅い何かが充てられた。ドクンッと心臓が跳ねさせられた少女が視線を落とすと胸の谷間には、鳩尾（みぞおち）から唇のすぐ近くまで乳間柔肌を占拠した淫魔のペニスが挟まれていた。

「――っ⁉」

（いっ、淫魔の、男性器……っ⁉）

生まれて初めて、しかも柔肌に押し付けられながらすぐ目の前で、処女退魔師は男性器を見せられた。

赤黒い本体は赤子の手首のように太く、牡牛の角のように堅く反り返っている。先端の

肉傘は本体よりも二廻り以上野太く開き、深く抉れた先端の放出溝は毒液を吐き出さんばかりに左右開閉をし、まるで深海などに住んでいる目のない未確認生物のようだ。しかも雷惨の身体は淫魔兵と違い、大小複数本の男性器を生やしている。

海洋生物と獣脂が混ざって煮詰められたような濃い汚臭に鼻腔が突かれ、お腹の奥から嘔吐感が湧いてくる。離れている顎の輪郭でも感じられる程の熱を放つ勃起体には様々に太いミミズのような血管が巻き付いて、本体と同時に淫欲深そうな脈動をブクンブクンと打っている。先端の口が一際大きくクパリと開かれると、透明な淫液が粘度高くこぼれて静音の首を汚した。

（……なんと、醜悪な――っ！）

蛇のように伸びた雷惨の黒性器が充てられていても、淫魔と退魔少女との距離そのものは離れている。これではまだ、直接退魔力を打ち込む事はできない。

「む、むねに……っ⁉」

指触手に揉まれる濡れた双乳で淫魔のペニスをムッチュリと挟まされる。強く脈打つ淫勃起の蠢動が谷間の中心に充てられると、牡肉の熱脈に打たれるように黒髪退魔少女の鼓動が熱を上げさせられて高められる。柔胸全体で目覚めさせられた未知の熱欲が男勃起に触れさせられて、更に強く熱い女肉の淫欲にされてゆく。

（は、離れてぇ……こんな、熱いの――胸が、狂わされそう……っ！）

どうにかなってしまいそうなのに、どうしていいのか解らない胸欲求。柔乳を揉み締める指触手によって乳肉の根本をキュウゥ…と絞り上げられると、溜められていた何かが先端に向かって詰め込まれてゆく。巨乳処女退魔師の理性が、崖の縁へと追い詰められる。

「な、何かが、胸の中で……きうぅ……絞ら、ない…でぇ……！」

乳首が内側から追い詰められて、破裂しそうな圧迫感に先端媚突がプクンと膨らみ、静音の理性が恐怖と焦燥に駆られた。乳房と乳首がペニスを包むように寄せられた次の瞬間、静音の脳裏が一瞬強く輝き、胸先端が強烈な解放感に攫われる。そして――。

（い――いやぁ…っ！）

ぷちゅ、ぴゅちゅうううううぅぅぅぅぅぅぅっ！

穢れを知らない処女乳首から、真っ白い処女母乳が天高く噴き出された。胸に溜められていた耐えられない程の欲求が白い液体と共に射出され、少女の上半身は自らの白乳を浴びさせられながら、放出に伴う未知の性感覚でカクカクと震える。

「ひゃぐぅ――あきっきひゃああぁぁぁっ!!」

（わ、私の胸が……母乳を、母乳を噴き出し――絞られているぅ…っ!?）

視界の中で触手に絞られ、サラサラの健康白乳液を吹き上げる自らの双乳。しかし退魔師少女の受けている衝撃はそれだけではなかった。針ペニスに犯され開発された乳腺の神経が、抽送を教えられて淫液漬けにされた処女媚突の性神経が、噴き出される母乳に通過

される度に擦られるような刺激を受けて、知らない放出感覚を味わわされているのだ。
「はひっあきひぃっ…むねっ、わたしく、のっ、むねっ――はひっぐふぅっ!!」
処女の退魔師は勿論、そして女性が決して知らない、男性の射精快感にも似た母乳放出。
胸が絞られ母乳が噴き出される度に、上半身が跳ねる程の快感に襲われ、呼吸が途切れ途切れにさせられる。胸先端がプクリと膨れて白乳を吹き上げられると、脳内がチリチリと淫熱に灼かれて目の前が薄白く発光させられる。強い刺激に汗浮く身体は大きくくねられ、若い肢体を扇情的に泳がせた。
「巨乳のお前には胸奉仕を教えてやる。しっかりと覚え、これからは自ら俺様に差し出すのだぞ」
男淫魔がニヤリと笑うと、野太いペニスがムチムチと蠢き始める。谷間を占拠する黒勃起が溢れる処女母乳を浴びて上下に抽送を始めると、淫魔の脈動と少女の鼓動が重ねられて、母乳を噴き出しながらの胸奉仕をさせられ始めた。
ぷちゅヌる、ムッチュ、ぴゅちゅぅ、つるチュぷ、とろヌチュる。
「ぐく――っ女性の、胸を…何だと――クきゅうぅっっ、むねぇ、ふあぁぁぁっ!!」
只でさえコンプレックスである女性の象徴を淫魔に捕らえられて、牡勃起を挟み揉む卑猥な淫行をさせられる退魔師少女。しかし男性器の堅さと熱さを教えられてゆく処女の身体は自身も知らない淫熱に炙られながら蕩けさせられ、嫌悪する理性を無視するように男

の獣欲に慣らされてゆく。
「フフン……ついでだ、お前のコンプレックスをもっと弄んでやろう…決して克服できなくなる程、決定的にな」
「こ、これ以上――んんぅうっ…なにを……ぅくっ!?」
乳首姦をした綿棒触手が再び吸盤型に変形をすると、母乳を吹き出させられている左右の処女乳首がカプチュッと隙間なく吸い付かれた。淫液で熱濡れた吸盤触手がホワリと朱く光ると、退魔少女の身体に恐ろしい変化がもたらされる。それは大切に隠していた入れ物を取り上げられて、閉じていた栓を目の前で勝手に開けられてしまうような、やるせない喪失感。冷静な長女の心をかき乱すのに十分な程の危機と焦燥。
(こ、これは……っ!?)
静音は驚愕した。出される母乳に吸収されて、淫魔を討つ為に身体の中で溜めていた退魔力が、ジワジワと吸い出され始めたのだ。
「――た、退魔力が……そんなっ、あっ――すぅっ、吸われてゆくふうぅっっ!!」
乳腺の中を流れる処女母乳に退魔力が溶け込まされて変質をさせられて、胸奉仕の射乳と共に身体の外へと吐き出させられる。乳房を揉み舐られ乳首を転がされて、淫液で身体を開発されながら温存するべき退魔力を奪われてゆく。
更に退魔力を含んだ母乳は乳首を揉み噛む吸盤触手でチュウチュムと吸われ、淫液の力

に変質させられて吸収される。母の仇、仲間の仇である雷惨を討ち倒す為の力が、容赦なくハッキリと奪われてゆく。

それは羞恥心の源泉でもある巨乳を敵である淫魔に弄ばれながら、淫魔の勃起に胸奉仕をさせられ、更に勝利の機会をも奪われていく、理性を打ち砕く為の恥辱責めである。

しかも揉まれる乳房肌も射乳を続けさせられる桃色媚突も、何をされても歪んだ甘電しか感じなくされていて、脱力させられた身体は抵抗すらできない。

「ふぐ――くはぁうっ……胸ぇぇっ、触手うぅぅうっ!!」

（は、離してぇっ、むねっ――ち、力が…奪われて……このままでは……っ!!）

羞恥と焦りで追い詰められてゆく少女の心。後ろ手に縛られて半裸に剥かれ、敗北しかない崖に向かって胸を引かれて歩まされているような、屈辱の危機感。思春期少女のコンプレックスを更に抉るようにつけ込んだ、執拗で淫湿な淫魔の羞恥責め。

柔胸谷間を味わうペニスがニュルリと伸びて、濡れた蛇の如くくねりながら少女の顔に狙いを定める。息を求めて喘ぐ静音が嫌な予感に口を閉じようとするが僅かに遅く、赤黒い勃起に唇を割られて口内侵入をされてしまった。

「あぷっ――んぷうぅぅっ！」

ぐぷぷ、こぷぅ…。

（く…口の、中に…淫魔の……っ！）

暖かい口内で唾液を存分にまみれさせる淫らな勃起は、上顎や内頬、白い歯の裏側や舌に熱い本体を擦り付ける。生臭い汚性臭に口内が蹂躙されて、焼けた鉄のように熱く堅い勃起の味が処女の味覚に覚え込まされてゆく。僅かにこぼれ出された苦い牡液は、海水と汚れた塩の混ざったような不気味な不味(まず)さ。少女特有の潔癖さは生理的な嘔吐感を胃の底から呼び起こさせられる。しかし。

（臭い、苦い…気持ちが悪い……のに…！）

口の中で感じる男性器の熱に粘膜が灼かれ、臭い匂いに媚孔が擽られ、苦い不味さに舌が震える。今すぐ吐き出してしまいたい汚行為なのに、顎が、舌が、唇が、受け入れもしないが拒絶もしない。倒すべき淫魔の汚れた性戯に、身体が順応させられてゆく。

自らの身体に戸惑う退魔少女に対し、淫魔ペニスは抽送を開始した。肉傘が抜けない程度に引き出されたかと思うと、喉奥に触れる程押し込まれる。ゆっくりとした前後蠢動は次第に速度を早め、ヅプゴプとした激しい突き込みへと変わってゆく。

噴射処女乳は雷惨の抽送に合わせ、ペニスを引かれると噴射がチュルルッと弱まり、喉まで押し込められるとピュヂュウウッと絞り出される。自らの柔乳が、胸谷間の淫肉勃起が、溢れ出る甘い匂いの暖かいサラサラ母乳を浴びて薄い白膜を纏うように濡れた。

「よぉく覚えておけ。女の口は男に奉仕し、褒美としての精液を頂く為だけにある物だ。こんなふうにな」

『第五章　不動三姉妹　敗北の巫女たち、絶対妊娠への完全堕胎』より

汗と恥蜜を溢れさせる獲物少女たちは淫青虫たちに群がられて、乳房や背中、お尻や内腿などの過敏な肌を好き勝手にナメ舐られる。黄緑肌色をした巨大な青虫の左右に開く口から、焦げ茶色の斑点を持った黄色い舌が伸びてきて、尻尾のペニスを堅く勃起させながら女体の蜜汗を美味しそうに吸い舐め取られる。

ちゅっぺチュぴュちゅ～、ペロぺとコチョちゅぷゅ。

「もぅ――んふうぅっ……おは、なしひ……ふゃあああぁ…っ！」

小振りな大根ほどの大きさと重さと、男性器そのものの体温と匂いと質感を持った淫青虫から、濡れた舌愛撫を全身に受けさせられる。過敏にされた全身は、肌の何処か一カ所を舐られただけでも全身の力を抜かれてしまい、骨も筋肉も砕かれたようにクッタリと脱力をさせられてしまう。

「む、むねへ――むねは…ぅふふぅん…もぅぅ……やめ…へはぁあ…っ！」

黒髪退魔少女の爆乳房が吸盤虫脚に吸着されて先端媚突を甘噛みされると、それだけで限界を超えた飢餓風船に最後の意識が押し潰されてゆき、遂に理知的で気丈な口からも許しの哀願がこぼれそうにされてしまった。それでも青虫たちは容赦を知らず、汗を吹く脇の下や細い背筋や弱い脇腹などに張り付いて、少女の汗を吸い味わう。

暴力のような性快楽の虫責めから逃れようと、最後の無意識が肢体を藻掻かせる。疲弊したうえ姉妹同士繋がれた身体は動きも遅く、前後左右に捻られる艶女体はかえって艶め

かしく扇情的だった。左右の爆乳がそれぞれ揺れて、柔らかい脇腹が曲げられ伸ばされ、開脚された腿の骨盤付け根が柔らかく食い込み美味しそうに皮下脂肪を見せ付ける。

同じく拘束されている赤髪の退魔少女は、天地逆にされて質量を増した両巨乳の桃色媚突を熱濡れ虫舌でしゃぶられながら、秘性器全体を舐め遊ばれていた。

「ぃひゃひっ――ひゃめへぇ、からら…ぁっくゅうぅっくっ…くるっひゃふぅっ……っ」

鍛えた退魔師とはいえ末妹である七重は、もう哀願の言葉を止める事ができなくされている。限界まで開脚させられ晒されている少女性器は、青虫たちの舌で肉芽を絞り舐られて薄い朱媚襞を揉み吸われて、尿口も膣口も舌抽送を受けさせられていた。からかわれるように突つかれる肛門は、愛撫される膣口と一緒に不規則な収縮を見せていて、こぼれる恥蜜を纏わされて幼い姿で淫靡な艶色を見せている。

「ゆ、ゆるひ――あぷん……んく、むぷぅん…っ！」

巨乳の谷間を陣取られ、サクランボのように艶めく朱い唇が淫青虫の黄色い舌を呑み込まされてゆく。幼虫の口に密着されて完全に唇を奪われて、喉の奥まで濡れた舌を差し込まれると、子宮はまるで上下から串刺しにされたように熱刺激を受けて淫熱炙りにされてしまう。

淫魔の宣言通り確実に意識が押し潰されてゆくのが追い詰められた無意識でも解るのに、止められない。

「ぉり、おりっ…んはくぅ……おり、なはいぃ……っ！」

二人の姉妹と共にお尻を上げる天上開脚姿勢にされたショートカットの退魔少女は、項上であるお尻頬を左右から青虫に征服されて、複数の虫舌で肛門抽送愛撫を受けさせられていた。媚肛のシワを一本ずつ舐められ内壁を吸われ、腸壁から子宮を熱愛撫される。

隠せない乳房を揉まれ吸われて、更に淫魔に向けて頭を固定されて敏感な両耳を内部まで舐められると、全身が甘電に痺れさせられて引き締まったお腹はただ小さな痙攣を繰り返す事しかできなくされた。

「ひゃぐるぅ……ミミ、フィフィらめら――おひっおひり、はらひやあぁあぁぁっ！」

左右からの虫脚で開かれ晒される濡れた秘粘膜。達する寸前で責められる肉芽は朱身を剥き出してわななき、短く乱れる息に合わせて収縮する媚膣口からはピュっピュプっと透明な恥蜜が溢れ出す。

淫魔どころか最低の虫にまで抗えない事実に、勇ましい次女の無意識が惨めな敗北感で砕かれてゆく。

少女たちの子宮が飢餓風船で熱暴走をさせられて、肉体が容赦なく脱力させられる。押さえられた手足は完全に力を失って、もはや触手から解放されたとしても逃げ出す事もできず、ただ淫青虫たちの愛撫を受け続ける事しかできないだろう。

三姉妹の肉体は、仇である男淫魔に完全に屈服させられていた。今少女退魔師たちの最

後の無意識を追い詰めているのは、雷惨でも青虫でもない、淫敵の性感を甘受する自らの肉体であった。
少女たちの頬を触手で取ると、淫魔はわざと視線を合わせて最後の責めを告げる。
「これからお前たち三姉妹全員を強姦し、その子宮の奥深くに催淫性の特に強い、俺様の絶対妊娠精液をたっぷりと放ってやろう。既に最後の無意識も塵一粒……もはや妊娠を回避する事は適うまい……クックック」
「ぜったい…にん、しん……っ！」
少女たちの瞳に宿る最後の意志が、動揺に揺れる。
絶対妊娠精液。それは強力な淫魔が持つ、犯した女を三日以内で確実に孕ませる悪魔の淫精液である。淫魔に純潔を犯されて力の源が穢されても、その後に救出されて身を清めたのち人間の子を身籠もれば、生まれてくる子供に退魔力が受け継がれる事は多々ある。
しかし絶対妊娠精液を子宮に受けて孕まされたら最後、その後どんなに身を清めても退魔力が受け継がれる事はなく、退魔師にとってはまさに天敵と呼ぶべき淫毒である。
嘗て強力な淫魔との闘いに敗れ犯されて絶対妊娠をさせられた女性退魔師は、一人残らず家系が途絶えさせられていた。
「いんまの、こを……っ！」
淫魔と闘う為に鍛えた退魔師といえども、雷惨を主と服従する身体に躾られてしまった

子宮では、妊娠精液など受けたらひとたまりもない。しかも強い催淫性を帯びている精液であれば尚のこと、熱子宮は無条件に喜び頂き、憎き淫魔の子は確実に妊娠させられてしまうだろう。

「ぃ……いやあああああぁぁぁぁぁっ!!」

淫魔の股間から朱黒いペニスが伸びてきて、恐怖する三姉妹の肢体に牡特有の重い熱感を持って絡みついてきた。肉傘の広がる先端部から二十センチ程の長さまでが角のように堅く反り返り重たそうに揺れていて、触手本体は根本までが蛇のようにくねっているそれは、まさしく雷惨本人の淫男性器だ。

先端の肉割れから透明な先走り液を垂れ伸びさせて、濡れた熱い肉身で少女たちの肌に撫で絡む。犯される獲物たちに恐怖を味わわせるように媚顔の上に淫粘液を垂れこぼし、少女たちの髪や鉢巻、頬や眼鏡が淫らな邪液で汚される。

三人の退魔少女は飢餓性感で濡らされる充血膣口を青虫触手によって柔らかく左右に開かれると、一段と野太い勃起牡肉を充てられた。

ムッチュリ……。

「ひ――ゃ、ゃめて…にんしんィヤ――ぁっはぁうぅぅ…っ!」

朱黒い堅ペニスで桃色濡れ媚孔を押されると膣入口の敏感性神経が一瞬で灼かれ、子宮から背筋を通って脳幹までもが強い甘電に突き抜けられる。逃げる事の適わない恥辱の天

上開脚姿勢で固定される少女たちの狭媚膣が、男淫魔の孕ませ勃起をゆっくりと押し込められて、呑み込まされてゆく。
「くひ……は、かはぁ…はくは……」
っぷ……むちゅムつゅぷぷ……。
只でさえ息苦しい体勢なのに、ペニスの重さを掛けられながら狭い熱膣が拡張されて、内臓そのものが押し下げられてくるような感覚。熱勃起の圧倒的な太さと堅さに胎内が奥へ奥へと支配されてゆき、熱と圧迫感で息が抜かれて意識が蕩かされてしまう。
濡れ膣いっぱいまで犯され制圧をされると、肉角が回転を始めて牡熱い肉割れで堅い子宮入口をこね愛撫をされた。
グリグリ……ぎュちゅっチュぎゅちュる。
「ぎゃくぷぅ――お、オラカのほく……ぐりぐり…グイグイひやあぁ…っ！」
「な…なな、ぇ……んふくっぅふぅうぅ……っ！」
赤髪の退魔少女は呂律の廻らない舌で許しを乞いながらも胎内奥を熱灼きにされて、瞳の意志は消滅する寸前にまで追い込まれる。狂わされてゆく末妹を案じながら二人の姉も、息を乱し身体を震わせ脳を灼く性刺激に耐える事しかできない。
催淫性の強い妊娠先走り液を満遍なく塗られた狭い子宮口が、広がりきった肉傘に押し広げられて姦通をされる。肉芽の次に過敏な胎内の入口を犯されてしまうと、もう抵抗す

る最後の塵無意識が牡熱肉の圧迫を受けて、消滅への坂道を転がされ始めた。
「れりゃ…おひゃめへ、らは――ひゃひひいいっ……っ！」
「いやはあぁぁ……あつ、あふいろぉっ、きつひろほほぅ…っ！」
「ククク…惨めで無様な姿だなぁ、なにが最強の退魔師一族、不動家三姉妹か」
三人の獲物を見下ろして蕩けた瞳を確かめた淫魔は、完全陵辱への三姉妹同時強姦抽送を開始した。子宮柔壁を肉押ししながら締まる子宮口を肉傘で撫でさする淫愛撫。女肉と心を淫堕させる為に、じっくりとゆっくりと、奥深くでの数センチ抽送を繰り返される。
……っちゅ、つぷむ…ちゅぅ、るぷぷ……んちゅ、くりぐりり……。
「きゃふうぅ――しきゅ、ひきゅふうぅぅぅっっ――あくっはくうぅっ、アタマ…ハタマが、とけてぇ…ひまゅふ……っ！」
太堅い肉傘に往復の通過をされる度に子宮の飢餓欲求が熱炙りに煽られて、切ない焦れったさで汗を浮かせた女体が責められてしまう。熱鉄のように熱い男性器で埋められた媚膣壁は強姦ペニスに対して歓迎の恥蜜を溢れさせて抱きしめて、上下に拙く柔壁熱愛撫を繰り返す。青虫触手に広げられた濡れ秘唇は物欲しげなわななきで収縮し、剥き身にされた肛門は膣口と一緒に収縮をして肉体の性感を征服者の目に伝えた。
三人それぞれの熱濡れ媚膣を犯す淫魔は、全ての勃起で三者三様の締め付けを味わっている。

静音の膣は真っ直ぐで入口から半分まではヒダが多く、奥までの半分は小さな粒ヒダに覆われている。奥に向かって締め付けながら亀頭の裏側を無数の粒で愛撫をして男性に奉仕をするという細やかな動作は、責任感の強い長女の性格を表しているようだ。

ボーイッシュな凛の膣道は無数のヒダと粒微が全面で混ざり合い、挿入された男性器の全ての場所に同等の快感で感謝を伝える。締め付ける場所が何段階にも存在していて、抜き差しをする度に肉傘の裏を何度も擦る奉仕愛撫は、一見単純だが何度犯しても飽きのこない明快な味わいを誇っていて、サッパリとした次女の性格そのものを表している。

末妹である七重の媚膣は数センチ毎に細かいヒダと粒ヒダが交互に並んでいた。更に奥に向かって緩く捻れていて、抜き差しをする度に肉傘や傘裏の筋、本体左右や先端先割れと、男性器の全ての箇所を懸命に締め付けて愛撫をしてくる。不器用だけれども生真面目で頑張り屋な末妹の性格をそのまま表していた。

「かひゃ、んくうぅ……もぅ、おくは――かふうぅぅ…っ！」

「ひヒンマ、り…こんらぁはっ……はふ、はぁあぅ…っ！」

別々の速度とタイミングで子宮口愛撫を受ける少女たちは、手足を繋がれた姉妹同士の藻掻く振動でも子宮と脳を甘電させられる。じっくりと犯される桃色媚膣からは熱い恥蜜がコプトプと溢れ、強姦者のペニスを濡れさせ続ける。

息が詰まって苦しいのに犯される艶喘ぎは止まる事がなく、左右から聞こえる姉妹たち

の陵辱淫声が耳から脳へと伝えられると、脳と聖宮の快感神経が繋がれてしまい肉体性感までが共有させられているようにさえ感じられてしまう。

熱快楽の汗に肌が覆われ、恥蜜や淫魔淫液の匂いと混ざり合った淫らな液体がこぼれて愛顔が濡らされて、淫靡な芳香に鼻腔が突かれる。

「は、あぅ…いやら、ひぃ……りおぃ――ひゃっ…ま、また、むしひ…っ！」

拘束されて姦堕抽送をされる少女たちのお尻の肌や背中、脇の下や乳房の肉曲面を流れる艶汗を舐めようと、周りで蠢いていた無数の淫青虫たちが一斉に吸い付いてきた。

「ひゃやっ――ハダ…ハラ、すわなひ、れへぇやはううぅ……っ！」

「レロレロひや……ぁふぅっひんあんん…ちぅちぅひちゃやめれえぇっ！」

ちゅっチュぷ、かぷモチゅっンクんちゅ～、レロぺろクルちゅっペチュろリュろん。

虫脚吸盤で乳肌を吸われ、虫口で背筋をしゃぶられ、乳首やお臍を黄色い舌で舐められ転がされる。全身の敏感な肌を一斉に舐め吸い嬲られて、媚弱で無数の甘電に性神経が貫かれてゆく。

「あきゃはあああぁぁぁっっ、ぃやひやひやはぁっ――ハラひゃふっ……っっくりゃああああぁぁぁぁぁっっ!!」

肉体を隈なく擽られるような全身媚愛撫を受けさせられて、少女たちの脱力した身体は拙い動作で忙しなくくねられる。力ない瞼が助けを求めるように弱々しく見開かれて、呂

律が廻らず意味不明の言葉しか吐かれない。目の前が小さな無数の発光で明滅させられて、鼓動が更に早められてゆく。確実に狂わされるであろう性快楽から逃れるように、繋がれた手足が押し引きしあうと、姉妹の女体はそれぞれが扇情的に揺らされる。

「いい顔だ、そろそろ完全淫落に堕としてやろう」

最後の無意識を砕かれてゆく退魔少女たちは、遂に仇淫魔による強姦抽送の速度を早められた。

…っちゅ、つぷキュうぅ、キュぷっちゅぅっつっちゅぷっツヌるっヅちゅっ！

「まひゃ――あっかはっやあぁっ……ぁひっひぃんきぃやあぁぁぁく…っ！」

太くて肉厚な牡の先端膨らみで媚軟な膣入口の粘膜を一気に抜かれて引き擦られ、子宮壁が強く叩かれるほど強く突き込まれて媚孔を埋められる。媚洞内部のヒダも粒も熱い男性器に強く激しく擦られると、膣壁から聖宮までの女性粘膜全てが激性感に灼き溶かされて、子宮そのものが男性という存在に無条件服従をさせられてしまう。

激抽送される毎に締まる膣壁が燃やされて背筋から脳までが強い甘電に貫かれ、思考神経が性感で灼き壊されてゆく。天上開脚という恥ずかしい体勢での上下姦通で三人の乳房は激しく揺らされて複雑に艶めき、乳房振動に揺らされる先端媚突からも性の快楽振動が子宮へと送られてくる。

「やぐぅっ――かはんんっ、おかはっ…おかはれえっへるろり……いぎぃっいいいいい

いいっっ！」

犯される全身が熱い性熱快感で灼かれてゆき、女性本能が犯されて埋められる歪んだ喜びだけで確実に支配されてしまう。女性たちを護り淫魔を倒すべき退魔師少女たちの身体と脳が、女を犯す男淫魔に性僕として躾られてゆく。

「悔しいか？　今度は尻だ、女退魔師どもよ」

歪んだ強姦快楽に支配されながら収縮する膣口のすぐ後ろで、同じ動きを見せながら息づく姉妹たちの桃色肛門。淫青虫たちに広げられて舌舐め愛撫をされる敏感媚肛に、淫液を滴らせる赤く透けたペニス触手が近付けられて触れられる。

「ひっ――おひ、オヒリっ…オイリつつからっ――ひゃんっきゅふんんっ……っつからいれっえぇぇっ…！」

数回の肉ノックで中心を突っつかれると、恥ずかしい場所に触れられた恥辱よりも男性器の熱と肉感で、女体の期待淫欲が燃やされてしまう。犯す女肉を更に焦らし燃やすかのように、肛門中心を肉割れ先端でクリクリとこねられる。

「はる、はるかひ――はんっひゃはふっ……ホヒリ、ホヒリは――はぐふうううぅぅぅっっ！」

っつぷっヌチュりゅぐうぅぅっ！

焦らされる肉体が悲鳴を上げそうになった刹那、三姉妹の熱媚肛は透けペニスによって

一気に突かれ犯されて、腸壁の奥深くまでが牡肉制圧されてしまった。
熱堅いゼリーのような表面を持った触手勃起に、通り抜けられながら灼き擦られる濡れた肛門。膣壁と同等の性感媚筒にまで性開発された肉肛は許されない筈の侵入者を熱腸壁で抱きしめて、媚薬に変質させられた熱い腸液をこぼれさせながら淫姦の肛虐者を濡れ歓迎をする。
肛虐勃起は数回の抽送で強姦速度を上げると、子宮を責める男性器と連動する陵辱淫姦を始めた。子宮姦の勃起が引き抜かれると腸奥深く貫かれ、腸姦ペニスが肛門付近まで抜かれると子宮口が貫かれて聖宮壁が叩かれる。
ズっちゅるヂュっつゅっツぷるっちゅづちゅっヌぷュるっチぷゅっずちゅんルぷっ！
「んきひぃあぁぁくっ――ぁひゃオヒんひいぃっ、あっはぁあっ……くるひゃっおひゃまくるっひゃらはあああぁぁぁっっ!!」
二孔への逆動作強姦で、少女たちの肢体は抜かれる飢餓感と突き込まれる充足感を同時に味わわされ始めた。子宮が犯されて満たされると同時に肛門の肉を引かれて切なくされて、腸性感が満たされると同時にペニスを抜かれる聖宮が切なくされる。
腸壁越しの摩擦と濡れ膣からの直撃を受けて、飢餓子宮は狂わんばかりの淫熱灼きに炙られてしまい、脳まで続く脊髄神経までもが激甘電に晒されて淫性神経に染められてゆく。
更に全身の肌は青虫たちの濡れた熱舌で汗を舐め吸われて性神経を刺激され続けて、

肉芽は細いタコ脚触手に巻き付かれて吸われ尿口は膀胱にまで極細の微粒触手に強姦されていた。

「あそあひょこほぉ……むれぇ、おぱいもオヒリもぉっ――ぃいっぃっふぁいれふゅ――あんっぐぷぅっ！」

「ぃあ――んくっかぷむ…っ！」

更に長女の口に、次女の口内に、末妹の喉奥に、鮭肉色の触手勃起が押し込まれる。焼けた鉄のような熱圧迫感と獣脂臭い匂いで口内いっぱいに犯されてしまうと、鼻腔も脳も牡の獣性熱で直火灼きにされてしまう。女体性感に追われて奈落の縁で必死に耐える最後の無意識が、男性の圧倒的な存在感で容赦なく足場を突き崩されてゆく。

カプちゅっぐぷュりゅるっんぐクプっ！

ズぷっぢュるちょプムっがぷつぶんっんちゅづチュるっ！

三媚孔を激しく犯され全身の肌を舐められる強姦性刺激で灼き上げられると、肌に触れる感触全てが純度の高い淫快楽にしか感じられなくされてしまう。上から覗き込む仇淫魔の醜姿さえ自分たちが尽くすべき絶対の主と女の脳が教えられてしまい、知的で凛々しく潔癖だった退魔師の三姉妹は、もう二度と戻る事のできない奈落へと堕とされてゆく姦淫から、逃れる事ができなかった。

「ころままヒったや……ぁたひぃ――ゃはあぁっ、ゃめに…ラメりはれひゃふうぅぅ

っっ！」
犯されるだけの肉体は強姦甘電に熱灼きにされて汗に覆われて上気して、揺れる手足からは重力感と熱感が奪われてゆく。柔双乳房や震えるお尻、鍛えたお腹や背中は無数の淫青虫に濡れ舐め愛撫をされて、全身の筋肉は性快楽で痙攣をして指先一つ動かせない。
目の前が終わらない発光に覆われ始めると性絶頂が近い事が解らされてしまい、性快楽を頂こうと肉体は更に強姦男性器を締め付けた。
狭膣内と口内と腸壁で強姦する全ての牡肉が、ブクリと一段膨らんで熱を上げる。絶対妊娠の射精が近い事を教えられたのに、どうする事もできない。
このままでは仇淫魔の子を孕まされて、退魔師一族である不動家の血統が永遠に断絶させられてしまう。そんな絶対の危機感すらも、骨盤と恥骨で反響する強姦衝撃に子宮が灼かれてしまうと無意識の外にまで砕き飛ばされてゆく。
少女たち自身も知らない、女体に眠る牝が持つ全ての淫欲と欲求性快感までをも淫敵である男淫魔によって支配されて巧みに刺激されてしまった退魔姉妹にはもう、できる事なんて何もなかった。熱太い強姦肉での激しい浅深抽送に、身体全体の性神経感覚が持ち上げられて、自身の存在全てが激性感の頂点へと為す術もなく叩き上げられてゆく。
最後の無意識がグラリと揺らされて少女たちの瞳が蕩ける刹那を見逃されず、男淫魔の強姦抽送が限界まで引き抜かれて、最奥まで一気に突き込まれた。

「俺様の精液を受けて淫魔の子を妊娠しろっ、不動の娘どもよっ！」
――っづどぶんんっっ‼
「「――っっ‼」」
喉奥を、腸奥を、子宮壁を一段と強く叩かれた瞬間、静音の瞳が見開かれて目の前が眩しい発光に焼き付けられて、凛の細い背中が精一杯反らされて硬直し、七重の脳が性快楽の暴力的な甘電に焼き上げられて、少女たちはこれまで以上の未知なる性絶頂の彼方まで一瞬で跳ね飛ばされてしまった。肢体がサァッと桜色に染められて細かく痙攣し、汗も恥蜜も肌から跳ねて散らされる。
口内を犯すペニスが抜かれると退魔姉妹たち自らの口で、恥辱と敗北の淫絶頂艶声を上げさせられた。
長女としての責任感が、不動家当主としての使命感が、強姦絶頂に押し潰される。
「んひぃぁああああぁぁぁっ――リヒっリンヒン……おかぁはわ…みらはま……りん、ららえ……こめん、らはぃ――ぁぐぅっはぁああっ…リンヒンひわふうぅぅぅっっ‼」
ボーイッシュな次女の持つ高い自尊心が、見下していた淫魔によってどうしようもなく砕かれてゆく。
「ヒンマっヒンマは――かはぅっぐふっ、んはああぁぁっっ……ヒンマはまろセーシれヒっひゃふぅっ……へーヒがぁっオラカろらかりひいいぃっっ‼」

無垢で真面目で一生懸命だった末妹の自意識が、絶対妊娠の恐怖とそれ以上の催淫快楽で焼失させられた。
「ぁきゅはっ――ゴシュジっこひゅりんはま――くひゃあああぁぁっ……オラカろラカれリンヒ――コロモれきひゃふうううぅぅぅぅっ…っ!!」
その瞬間、残されていた最後の欠片無意識が二度と戻る事のできない奈落の底へと潰し捨てられて、姉妹たちの無意識までもが完全に消滅させられていた。
「ほぅら、絶対妊娠精液だぁっ！」
黒髪の聖弓退魔長女の胎内最奥で、ショートカットの打撃退魔次女の子宮内で、赤髪の剣戟退魔末妹の聖宮壁奥に肉密着をされて、強姦淫魔の絶対妊娠射精液が放出される。
っっぶブっどぶゅうううううぅぅぅぅぅぅぅぅっっ!!
ブぴュっゴプぶゅっぶプっドゴぽっブぢゃっヂュっびゅぷプぷプぷぷっっ!!
「あひゅふっ――んくゅっふんくっ……んぱふゃぐうううぅぅぅぅぅっっ!!」
ゼリーのように粘度の高い強姦淫魔の妊娠精液に強烈な射精を浴びせられて、退魔少女たちの聖宮が白濁液に吸着されて穢される。子宮が膨らまされる程汚液を詰められても射精は終わらされず、更に満たされて溢れさせられた精液は牡肉に圧迫される膣媚壁をヌメリ抜けて朱い媚粘膜へと溢れてこぼれた。
ヂュヂュっびゅうぅっどぶびュっブヂゅどろロっプぢゅうううぅぅっっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/